

## 第 24 回(2014.07.01 配信)

### 篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

#### 定火消と町火消

江戸の火災に対して、大岡越前守忠相が町民に「町火消」と呼ばれる自衛消防団を組織させたことで有名ですが、「定火消」などと混同しがちです。ほかにも江戸城を守るための「大名火消」があり、町火消と共に三つの消防組織によって江戸は護られていました。

慶長 8 年(1603)、徳川家康が江戸に幕府を開き、急速に町作りが始まったのですが、江戸城入城当時は荒れ果てた山村だった江戸の人口は、享保年間(1700年代前半頃)には140万人に達していました。当時、ロンドンの人口は80万人、パリは55万人でしたから、世界一の大都市でした。そこで、三代将軍家光は、寛永6年(1629)に「奉書火消」の制度をつくり、火災が発生すると幕府からの指令(奉書)によって、大名を招集して消火に当たりましたが、寛永20年(1643)、16の大家を指名して「大名火消」と呼ぶ消防組織をつくらせました。石高(こくだか:禄高)に応じて人足を出させて、江戸城や大家など武家屋敷の消火に当たらせました。

慶安3年(1650)四代将軍家綱は、4000石以上の高級旗本4人に命じて定火消という消防組織をつくり、飯田橋、市ヶ谷、お茶の水、麴町の屋敷に常時役人や火消人足を詰めさせて、火事が起きたらすぐ出動できるようにしました。宝永元年(1704)には定火消が10組になって、「十人火消」とか「十人屋敷」とか呼ばれました。この消火に当たる人足を「臥煙(がえん)」と呼び、常時火消屋敷に寝泊まりさせていましたが、寝るときは一列に並んで一本の丸太を枕にして、火事の際には寝ずの番が枕の端を木槌で叩くとその衝撃で全員が飛び起きるという仕組みで、これが「たたき起こす」の語源になりました。

江戸は人口が急速に増えたため、人口密度は非常に高くなり、木造家屋が密集していたので火災が多発しました。明暦3年(1657)に起きた「明暦の大火」では、江戸の大半が焼失して死者も10万人を超え、江戸城も焼失し、その後江戸城の天守閣は再建されませんでした。

享保3年(1718)町奉行大岡忠相がこれまでの火消し組合を再編成して、「いろは四十八組」のほかに、本所深川の16組を合わせて64組の町火消ができました。なお、明暦の大火が「振り袖火事」と呼ばれた理由は、ある娘が本郷の本妙寺で見染めた寺小姓に恋煩いして亡くなったので、着ていた振袖を本妙寺で供養してもらった際に、火中に投じた振袖が突風で空中に舞い、それが原因で大火になったという怨念話がよく知られています。しかし、急速に発展した江戸の都市改造のために、幕府が放火したとか、火元が幕府の重要な人物の屋敷だったから、これを秘匿するために本妙寺が火元を引き受けたなどの説もあります。真相はどうあれ、恋煩いの怨念話の方がいつの世にも最も日本人に好まれるのです。

#### 旗本奴(はたもとやっこ)と町奴(まちやっこ)

大名行列などの絵巻に槍を持ったり駕籠を担いだりする足軽以下の使用人は、一様に短い半纏を羽織っていますが、これらを「奴」といって凧の絵柄にもなっていますから、「旗本奴」や「町奴」などと混同しがちです。旗本奴は、江戸時代初期、派手な身なりをして徒党を組み、町民たちに乱暴をはたらいた旗本や御家人です。また町奴は、旗本奴に対抗した町民で、派手な格好と売られた喧嘩は必ず買うといった無頼の連中でしたが、町民たちには人気がありました。

もともと奴は「家っ子」からきており、ここから下っ端の、あるいは半端な人間を指す言葉になったといえます。旗本奴や町奴は、派手な衣装を纏い派手な行動をしていましたが、これは戦国時代の風潮で「かぶく」といい、これらの者を「かぶき者」と称しました。戦国時代から江戸時代初期のころにかけて多かったようですが、これが歌舞伎の源流だという説もあります。豊臣秀吉の小田原攻めに遅れた伊達政宗は、秀吉の派手好みを知っていましたから、全軍に白装束を着せて街を練り歩き、秀吉から「かぶき者」と称されて許されたという話もあります。また、朝鮮出兵の際にも派手な軍装だったため、ここから「伊達男」の言葉が生まれました。

旗本奴で有名な水野十郎左衛門(みずのじゅうろうざえもん)は、福山藩主水野勝成の孫に当たる 3000 石の大身旗本でしたが、暇な身分から、大小神祇組(だいしょうじんぎぐみ)という組織の首領となって、揃いの服装で町を練り歩き、町民に乱暴を働きました。町奴の代表格には幡随院長兵衛がいました。幡随院長兵衛(ばんずいんのちょうべえ)は、佐賀藩士塚本伊織の子で、今でいう職業斡旋所ともいうべき「口入れ屋(就職あっせん所)」を営んでいましたが、乱暴を働く旗本奴と対立して町奴の頭領となりました。この対立で多くの町民たちが旗本奴からの被害を免れたといいますが、逆に迷惑を被った人たちも多かったようです。

明暦 3 年(1657)7 月 18、水野十郎左衛門は、仲直りを理由に幡随院長兵衛を呼び出して、風呂場で斬り殺しました。水野十郎左衛門は「無礼討ち」であるとの理由で罪にはならなかったのですが、7 年後の寛文 4 年(1664)、幕府の評定所から、「ふだんの行いがよろしからず」として切腹を申し渡され、家名断絶(家禄没収、家族追放)してしまいました。

ところで、日本三大仇討ちのひとつとして有名な「荒木又右衛門の伊賀越え決闘鍵屋の辻」事件は、寛永 7 年(1630)、岡山藩主池田忠雄の小姓渡辺源太夫が、同藩の藩士河合又五郎に殺されるという事件が起き、この又五郎が旗本安藤次右衛門正珍にかくまわれたことが発端でしたが、河合又五郎の引き渡しを求める池田家と、拒む旗本との対立が熾烈を極めました。

当時激しかった外様大名と旗本の確執は、その原因のひとつに外様大名の禄高が譜代大名や旗本の禄高に比べて非常に高いことがありました。水野十郎左衛門などが旗本奴として乱暴をはたらいたのは、それら鬱積した不満がその背景にあったと思われます。旗本たちの親分格の大久保彦左衛門が、「天下のご意見番」としてさまざまな活躍をしたという逸話は有名ですが、この大久保彦左衛門が書いた『三河物語』にも、功績のあった旗本たちより外様大名の方が給料が高いという不満が書かれています。

余談ですが、この『三河物語』には、旗本たちが徳川家のために命がけで戦った様子もいろいろ書かれています。大坂夏の陣では真田幸村に家康の本陣が突き崩れされた際に、踏みとどまったのは彦左衛門だけだったなどと、ちゃっかりと宣伝しているところもあります。また、沼津城主の次兄に後継者がいなかったのも、末弟の彦左衛門に継がせようとしたが、「自分の功績ではないから」と断ったため、沼津二万石は改易となった事件とか、小田原城主だった長兄が失脚した際に、3000 石の旗本の地位を返上して抗議したことで有名な人です。これらはあくまでも逸話ですが、悪いことをしても給料を返上するなどの偉い人はいないどころか、子会社や関連団体に天下りしてしらばっくれている人が多いのが現在です。

(篠井純四郎)